

三河アララギ

2023年 令和5年1月 睦月
むつき

新 年 号

第七十卷 第一号



ニューヨーク日記(195) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

BEST KNAFEH IN NY

Blue Shoe Diaries



ニューヨークには小さな世界があって飛行機に乗らずにどこにでも行けます。この前晩御飯にモロッコ料理のラムのタジーンが食べたくてアストリアのリトルエジプトに話題のレストランがあるので行ってきました（美味しかった）。行く途中美味しそうな中東のお菓子屋さんを見かけて帰りに寄ろうと決めてたので寄ってみたら丁度キッチンから大きな丸いお盆にオレンジ色のお菓子、knafeh（パリパリのトップと下はチーズでスパイスの効いたシロップに付けてあるお菓子）が運び出されるとこだったので「それ、ください!」と。味見だけしようと思って一口食べたらあまりにも美味しくて全部食べてしまいました。

There's a mini world within NYC. I felt like having a good tagine, so I went to Astoria's Little Egypt where there's a fantastic Moroccan restaurant with the best lamb tagine, which was wonderful. On my way there, I passed a small baklava shop, making a mental note to return on my way home. When I stopped by this Middle Eastern party shop, Al-Sham Sweets & Pastries, I saw a big round tray of this orange-colored sweets coming out of the kitchen, still warm. It was a knafeh. I just had to try some. It was eye-opening! with crunchy spun pastry on top and cheese underneath. I was going to have a little taste but ended up eating the whole piece I got!

目次

第七十巻第一号(通巻八二九号)

表紙・芽立ち メヒルギ	今泉 由利(1)	伊藤 晴江(29)	川口カルチャー受講者自作自詠俳句集
ニューヨーク日記(195)	Blue Shoe(2)	水野 絹子(29)	令和三年三月(36)
歌集 わが冬葵	御津 磯夫(4)	牧原 規恵(30)	五感を澄ませば(7)
歌集「草々後集」	今泉 米子(5)	稲吉 友江(30)	附録(七)
昭和60年一月号作品	大須賀寿恵(6)	鈴木美耶子(30)	『明るい年になりますように!』
昭和60年一月号作品	夏目 勝弘(7)	吉見 幸子(31)	
昭和60年一月・二月号作品	岡本八千代(8)	現代学生百人一首	東洋大学
明治節	弓谷 久子(10)	塩澤 希風(32)	楽しい時間(122)
奄美大島へ	今泉 由利(12)	竹中 杏珠(32)	『酔いの徒然』(129)
千両も万両も	安藤 和代(14)	堀 葉月(32)	『房州花摘み唄』
暖かくつまれ眠る	清澤 範子(16)	武内 麗雄(32)	絹の話(146)
冬のタンポポ	山口千恵子(18)	板垣 春菜(33)	『江上浩二の独り言』
月曜日	杉浦恵美子(20)	藤原 久遠(33)	初狩便り14
ぶらり旅	伊藤 忠男(22)	藤森 大晴(33)	本田カイロプラクティック先生の春夏秋冬
孫の七五三	白井 信昭(24)	首藤 亮太(33)	康鍼治療院
割と近くに	矢崎 直人(26)	植村 公女(34)	京都に遊ぶ
『いとよせ』	いーはとぶ	木村 歩歩(34)	編集室だより
	牧原 正枝(28)	今泉 如雲(35)	『三河アララギ』について
	森 厚子(28)	今泉 由利(35)	(64)
	山崎 俊子(29)	矢崎 直人(35)	

歌集 わが冬葵

御 津 磯 夫

笹の葉のゆらがぬいまを携へて羽田を發たむわが若き子ら

三萬日といへどもつひに長からず殘るこの日を梨返り咲く

掠鳥の一群はやくすぎし空窓より見たり臥床ふしどにかへる

熱にねむりひるのねむりは夜るにつづき幻にたつ何ものもなし

胸さわぎしつつつかれて眼をひらく光くぐもる黄昏の中

われをめぐる草木も石も金色こんじきに涅槃ねはんにあらず黄昏のとき

秋の日のこの世のものの音聴きて泪のたまる老の眼を閉づ

多賀城にみたりめのわが孫生れむといさみ言ひくることのよろしき

生きをればわが履歷書も長し長し忘れ果てしも堀りいだされて

書きのこす價なくともわが庭に昨日雨ふりけふ秋の風

歌集 「草々後集」

今 泉 米 子

白き壁の管より酸素を吸ひながら眼にうつれるは夕茜の窓

外庭の印度カヤツリに束ねられて輝くばかりの黄の曼珠沙華

今宵八時にひらき始めむと言づけて月下美人のふつくら蕾

ベッドの上に蠅一匹を打ちにけりそれより清し暫くのあひだ

帰り来てわが庭の上に向ひをり芭蕉葉しづけし今日の夕日に

入院の幾日忘れて帰り来ぬ大犬蓼の垂るる花房

あだ霜の来ざるか庭の芭蕉葉の破れたるままにしづまりにけり

風船かづらのこまかくゆるる白き花降りて歩みたしわが庭の径

大犬蓼の花穂折々雫してふりゐる見えず寝椅子の窓に

家人もいづこにかゐむ真昼間の秋の光りは椿の葉より

昭和60年1月号作品

大須賀寿恵

凍み痛む両手を胸の上におきて安き眠りに入らむとする

ふくらはぎ揉みつつ今宵も眠るなり久々の雨庭松に降る

朝々に通ふ医院のフェンスの道胡桃十九を拾ひためたり

花なきをおとしめゐし山菅の緑さわさわのわが冬の庭

詠まず書かずもの言ひもなく幾日を罪犯す如く我は臥しゐる

真夏日に挿ししブーゲンビリアより秋の芽のびて蔓となりゆく

楓紅葉光れる下を歩みつつ頬の火照るが如きおもひす

よく噛めば冷飯は旨し独りしてけふの昼餉を楽しみてをり

四日の月没ちたる宵の闇の中に朧に白し浄願寺墓地

悉く葉の落ちゆきし木芙蓉に今朝しほしほの花のむらさき

昭和60年1月号作品

夏 目 勝 弘

腕を伸ばし眼細めてゐる今日の日付の活字は何処

夕焼の褪せゆくいろを眺めつつ遅るる電車をホームにて待つ

夏の日只管堀りしも遥かなり再び会ひぬ水神平式土器

返されぬ土偶のことなど言ひてゐし父逝きてよりはや十五年

それぞれの座席決まりてゐらしき通勤電車の我が位置も亦

裏庭を被ひゐし草々衰へぬ幾億粒の種子を残さむ

小さき山小さき丘さへもなきところ小坂井町の小字を巡る

残るべきはいよいよ形の整へり衰へ始むる夏草の下に

黄に紅にまた緑なる楓あり傘寿碑白きみ寺静かなり

それぞれの木々の下には各々の落葉のあるが不思議でならず

昭和60年1月号作品

蒲郡 岡本八千代

手作りといふ奈良墨を貰ひたり名花十友の金文字光る

名花十友の草書体の友の字を奈良古梅園に電話して聞く

時をりは左廻しに丸くすり名花十友の奈良墨を摩^する

ポストまで葉書一枚持ちてゆく常よりわれは歩幅大きく

KANGOLの夏の帽子を洗ひをり萩の黄葉に日のさすところ

海の上を来たる時雨にまづ煙るわが住む西浦の大山岬

わが庭の志賀山寺の稚萩の黄葉^{もみじ}し散りて冬日となりぬ

豆粒のごとき黒き掌の上に載せて見てをり香の梅が香

香炉には菱灰の赤き灰入れて我が家初めての香を炷^たきたり
匂はざる如くして匂ふ梅が香の香匂ひつつ訪れもなし

昭和60年2月号作品

朝の光さしくる中に藍色の切り子硝子のコップを洗ふ

汲み置きの馬穴の水に唐楓の黄葉の一葉浮かびてゐたり

栗南瓜の小さきを四分の一ばかり甘煮にしたり今年の冬至

冬至の日に煮たる蕪かぶらと栗南瓜がいつまでも棚の奥に残れり

また今年も師走の忙しき時に来て若き庭師は松の手入れす

明治節

豊川 弓谷 久子

文化の日となりて久しき明治節小春日和の空晴れ渡る

明治節は小学校の運動会と定まりゐたりき我が故郷は

太鼓の音が今も耳に残りをり村中総出のあの運動会よ

子と共に夜の庭に立つ朝より待ちゐし満月皆既月食

赤黒く半分欠けし満月が夜空にぽっかり浮かびてゐたり

峠より全望眺めし日もありき四谷千枚田がテレビにうつる

アララギの友等と訪ねし千枚田刈入れあとの風景なりき

歌会一度も休みし事無し唯一我が心のかてなりよりどころなり

楽しかった思い出ばかり浮かび来る御津先生よ歌の友等よ

十年に一度の今年は生り年と箱いっぱいの柿を呉れたり

柿ジャムを永く楽しまむ我がむきしうれ柿を子が煮つめをり

細かき字ルーペにて辿る身となれど何故か寂しき今朝休刊日

あかあかと庭色どりて楽しませくれたるコキヤも遂に素枯れる

縁先のアロエの蕾二十本花茎すつくと立ち並びたり

過ぎて行く月日の速さよ小春日の続きし霜月終り真近し

奄美大島へ

東京 今泉 由利

太平洋と東シナ海の内にして亜熱帯独特植物奄美大島

東シナ海と太平洋とをひと目にてマングローブ林に分け入らむとす

「アダン」「ヒカゲヘゴ」「クワズイモ」「サガリバナ」「メヒルギ」「オヒルギ」「モダマ」出合ひつつ居る

常緑のつる性大木螺旋によじれ大いなる豆果「モダマ」なりをり

南南東の風吹きてゐる奄美大島吃驚^{びっくりぎょうてん}仰天あのことこのこと

カジユマルの林に潜りまず出会ふ10センチ程のベビーカジユマル

奄美大島太古の島のいとほしいまろまろとしてほのかに甘い水

奄美なる泥の鉄分とシャリンバイのタンニンにて大島紬を染めあぐるごと

木性のシダ「ヒカゲヘゴ」は亜熱帯やんばるの森にて近づきゆくよ

今を生きる化石であると木性シダ「ヒカゲヘゴ」黒潮の森へわけ入る

山の椎段々畑の薩摩芋山肌崖地に蘇鉄群生

亜熱帯常緑広葉樹の森と黒潮の海を見下ろす

太古より今に息づく命のことを宇宙の地球の奄美のこと

奄美なる豊潤な水よりの生命はつなぐ私の命加ふる今日は

淡水と海水と混り合い合う汽水域マングローブの群落に入る

昼間でも暗い原生林国の天然記念物特別天然記念物の動物達の住む

世界一巨大なさやを成す「モダマ」マメ科木性つる植物

風強い海岸にありアダンの木「田中一村」絵画きしところ

水平線のかなたより幸せが訪れくる伝説ネリヤカナヤ

千両も万両も

豊川 安藤 和代

虫の音もいつしか消えてコスモスも尚細く咲く霜月の庭

カーディガン着たり脱いだり今日の日よ山茶花の実の音もなく落つ

寒暖差に萎れておりし玉葱苗一夜の雨に凜凜しく立てり

楽しいと思えばそれも楽しけれ夕餉の献立悩みいる時

冷やかな風の夕べは「シチューがいい」孫リクエスト馬鈴薯をむく

冬バラは気高く咲けど蝶も来ず小寒き風が声かけてゆく

振り向けば苦しい時あり遠い日よ今は小さき夢を追いゆく

千両も万両も朱光る庭名知らぬ鳥が今朝も来ており

よき事がふたつありたり今日の日の誰れにも言わずコーヒー旨し

抱っこ紐の幼なは素足スーバーに若きママさんやっぱすごいね

冬陽差す庭木山茶花剪定す婆ちゃん庭師なかなかよろし

若き等につられて飲みしコーヒーに眠れずにおり聞く深夜便

秋霖に病葉ひとつ打たれいて稲荷の森に夕の鐘聞く

アララギ誌の先輩方の御短歌から元気頂き今日も短歌詠む

山茶花は米粒程の蕾つけ葉陰に震う初霜の庭

暖かくつつまれ眠る
春日井 清 澤 範 子

夫逝きてより三度目の庭の剪定を決めしこの日は雨が降るなり

重心を少し傾けばよろける腰のMRI撮りにし今日は

テレビ体操を見ながら椅子に腰かけて背筋を伸ばす吾の体操

四科にかかる吾なり亡き夫に好物のさつま芋のレモン煮を供う

年賀状の印刷カタログ届きたり30%の割引つきて

私の毛布は亡き夫が買ひくれしもの暖かくつつまれ眠るは幸せ

廊下からガラス戸越しに目をやれば八ツ手の二本つやつやの葉

庭椿の剪定終りぬさっぱり剪定来春に咲く花芽残して

やせ細ったわが手をみつむそして主婦業に最善をつくす

光を浴てつやつや光る八ツ手の樹ほうし飛び散る庭の賑わい

吾はS状結腸癌の宣告を受く夫も同じ病に逝きしに

十一月二十八日より余命一年の吾は抗癌剤治療が始まる

わが家は吾と娘の二人家族娘は涙してたった一人になるのよ母さん

大腸カメラはまず二ℓの水を二時間かけて呑み腸が水状になりて始まる

廊下に出て陽のぬくもりを感じつつ廊下のモップ掛けTの字廊下

冬のタンポポ

豊川 山口千恵子

ホトトギスカと指さし言ひぬ若き人その母好める花なりしとぞ

素枯れたるコスモス畑の脇を通る秋終はりゆく季移りゆく

洗濯物干してすがすが空仰ぐ暖かき日の今朝の青空

洗濯物干さむと出づる朝の庭石落咲きぬあざやかな黄

朝々の新聞とり出すポストの下しばし明るし石落の花

ホトトギス花咲く庭の今日ぬくし黄の蝶一つ舞ひ来て遊ぶ

洗ひたる銀杏ザルに拡げ干す小春日和の秋の日の下

新しく開店したる百円ショップ一巡りする何も買はずに

スーパーの棚に見つけしそばの粉そばがき作りくれし祖母思ふ

秋日和続ける田の原静かなり刈田に藁を集めゐる人

早々と刈りとり済みし稲田の中稲架かけしたる一枚の田

道端に散らばり落つるどんぐりを踏みて行きたり朝の散歩道

乾きたる鉢にそそげる朝の水金となる木に細かき蕾

暖かき日射しの下に咲くダチュラ秋の終りの十一月の日々

道端の草群の中に咲きてゐる冬のタンポポ花茎短かく

月曜日

蒲郡 杉浦恵美子

豊橋の暮しを支へし椅子二脚今寢室に鎮もりて在る

豊橋の暮しを支へし椅子二脚片割れ居ぬゆゑよすがとなりぬ

月曜日いちばん好きになりにつけりこれをしなくちゃあれもしたいし

月曜日仕事に戻るその憂さは何年経ても思ひ出さるる

月曜日勤務の頃と異なれり義務責任のない始まりは

朝刊に我が師の友が載りて居るあゝ健在一寸嬉しい

お名前は幾度も聞けど新聞に初めて見知る師の学友を

生憎に一度もお目文字叶はぬが我が師が幾度も話題にせし方

童話作家わが師の学友幾たびもその名を聞きて憧れし人

木曾川が蛇行してゐる八百津町橋渡る度水色深く

蛇行する木曾川沿ひに街がある樹々の緑と川の碧との

八百津には来るまで風景楽しめど戻るは延々三時間

我ながら下手ねと刻み続ければひとりに多しキャベツの千切り

皿小鉢積み重ねども今ははや一枚しか要らぬ五客の揃ひ

家の皿もう要らぬのに目に入りぬ黄瀬戸の小皿道の駅にて

ぶらり旅

大阪 伊藤 忠 男

思い立ち突然旅に出たけれど行く宛なきに心もとなし

東名のカープを曲がる前方に富士山聳え我迎えたり

名勝の名勝たるや孫の庭日本平は目と鼻の先

街灯り広がる夜景遺産とは永遠に続くを祈り見下ろす

頂上で両手を広げ駿河湾我が胸抱え独り占めする

富士噴火津波の脅威無きならばこれぞまことの静やかな町

西の窓開けて風音耳にする明日は晴れだとささやいていた

正面に富士の高嶺と眼下には三保の松原贅沢な町

海原の光を受けて権勢を今なほ誇示す権現の峰

何一つ変わらぬはずと思へども息荒くなり我が歳を知る

敷き紅葉踏み締め歩く毘沙門堂寒さ直ぐそこ冬迫りくる

四季桜紅葉とコラボ華やかに秋を彩る初景色

十六島温泉津うつぶるいゆのに恵雲土地えともの名は昔伝える語り部なりや

難読と言って土地の名変えるとか寂し限りや歴史が消える

スマホ持ち居眠りする人あちこちら週の初めの通勤電車

孫の七五三

豊川 白井 信昭

八階の病棟廊下窓の外三河の海の紺碧の青

ここよりは山並連なる御堂山うしろ後五井山重なり見ゆ

三谷なる星越の山この辺り目を凝らし見むこうぼうやま弘法山を

ストーマの管一つ抜け歩きゆく足取り軽し日毎夜毎

開腹の傷口癒えて歩きゆく病棟廊下端から端まで

交差路の灯あかりLEDに替わりし夜まばゆき光軒場明るし

ストーマの装具交換は週二回訪問看護うけるやむなし

梨^{イテウオン}泰院の勾配の路地ハローウィンソウル雑踏事故心が痛む

ストーマの管二つ抜けて今日よりは装具交換少しく易し

孫匠真小春日和と七五三付き添い行ける三谷の弘法山

匠真^{みとせ}三歳羽織袴に出で来たり思いを巡らす六十年前

静もれる本堂境内参道の視界ひらけて風光明媚

家族五人^{たり}拝殿前にて手を合わす幸多かれと祈り参らす

頂^{いただき}のここ南山^{みなみやま}錫杖^{しゃくじょう}の子安大師像そびえ立ちおり

三河湾国定公園^な風ぎ渡る沖合はるか霧かかりいる

割と近くに

埼玉 矢崎 直人

武蔵野線荒川こえて新座へとさいたま市から割と近くに

新座駅南口より平林寺野火止用水分水歩く

親水の野火止用水分水にザリガニ釣りの父子小春日

池袋川越間の交通量大変多き街道またぐ

枯れ葉道野火止用水沿へる道所々に大木なれり

武蔵野を偲ぶ野火止用水の幅一メートルも流れは疾し

野火止の台地玉川新河岸の二十五キロを穿つ用水

風の無き枯れ葉舞ひ散る平林寺小春日一枚一枚落ちる

平林寺真赤なもみじ出迎える時雨はじめる禪の境内

凌霄閣阿吽の像の筋骨のその逞しさ圧倒されり

高野槇野火止台地二股に枝は競ひて幾星霜を

釈迦普賢文殊三尊輝ひて釈迦の教えのいま輝ひて

『草枕』那美嬢モデル前田つな野火止の墓黙に佇む

歴代の修行おさめし高僧の暮石梵字の丸みをおびて

徳川の幕府の偉容裏白き朴の落葉の白きねむりの

『いっしょよせ』

西浦公民館 いーはとぶ

「笑点」も「ドリフ」もみんな再放送皆して笑ひしかのこと思ふ

牧原正枝

新刊のコーナーで借り来「らく朝」を笑ふつもりこの一冊

大須にて落語聞けるか検索す定席三日間毎月あるも

頷きて「へええ」と「ふうん」を折り混ぜて孫はこたふる一歳半よ

森厚子

うろうろの眠りの窓辺に涼風と微かな香り来あゝ金木犀

涼風に香りを混ぜて金木犀青きみ空にすつくと立ち居り

台風は酔芙蓉の花にも秋風をのこしてつひにすぎさりゆけり

山崎俊子

散歩する道の辺に赤き彼岸花よ今年もお前に時教へらる

朝の日に杉葉に落ちし水玉の輝き見つけ心うきたつ

わが職場の窓より見ゆる銀杏並木黄葉になりをり今にて知りぬ

伊藤晴江

金福寺こんふくじのドウダンツツジの真赤なり友と訪れしこの芭蕉庵

二年ぶり本宮山に登頂す山姥やまんばの岩に足裏合はせる

うら若き母と我との冬の朝のうかびて来るかな温きタオルが

水野絹子

今朝はこの温きタオルを老母に我絞り居る小暗き手水場

口開けて虫歯治療のその最中目裏に夕の買ひ物あれこれ

思ひがけずお会ひ出来たる人の居てダチュラの花の満開の中

牧原 規惠

三本のダチュラの蕾頂きて帰りしかの日また思ひ出す

洪柿の吊してありしベランダにさすがカラスも寄り付きもせず

カーテンは大きく揺れて秋を告ぐぼつぼつ始めん秋の衣替へ

稲吉 友江

十五年飼ひたる金魚は一匹になつてしまへり広き水槽

歩いてる私の横を風も行く後で落葉^{うしろ}のカサコソの音

中央公園の池の畔にひとり来て飛び石渡れば鯉らが跳ねる

鈴木 美耶子

とびきりの青空の中の鰯雲友らと見上げしかの日思ほゆ

偶然に弟夫婦とこの華展まう三年も会ふことのなきに

濃き色のローズピンクのコスモスを主役にしたり名古屋花展よ

吉見幸子

雨戸閉め台風凌ぐ今宵一夜ガタゴトガタゴト時過ぐるを待つ

亡き父の温もりの言の葉に支へられ生き越し日々の足元照らす

現代学生百人一首

東洋大学

自転車を私の横でひく君の日焼けした腕大好きでした

伊那西高等学校一年(長野県)

塩しお澤ざわ希の風か
16歳

教科書の文豪たちの問いかけにひとり脳内大討論会

岐阜県立大垣商業高等学校二年(岐阜県)

竹たけ中なか杏あん珠じゅ
17歳

「県大会行きたいじゃない行くんだよ」仲間の言葉胸を打つ夏

岐阜県立大垣商業高等学校二年(岐阜県)

堀ほり葉は月づき
17歳

夏の夜に明かりに群がる虫たちよ共に学ぼう現代文B

静岡県立磐田南高等学校 定時制四年(静岡県)

武たけ内うち麗れ雄お
18歳

農高生七時半から畑作業「おはよう」交わす野菜と私

静岡県立静岡農業高等学校一年(静岡県)

板垣春菜 16歳

亡き祖父の財布貰った夏休みこれが最後のおこづかいだと

光ヶ丘女子高等学校二年(愛知県)

藤原久遠 16歳

うちに来る越後の新米北のサンマ思いを馳せて食す時待つ

三重郡菰野町立菰野中学校二年(三重県)

藤森大晴 14歳

京の夜いつもと違う点六つ来年は見たい大の灯し火

京都市立旭丘中学校二年(京都府)

首藤亮太 14歳

『俳句』

書道展終え銀座の冬紅葉

植村公女

棒読みの百人一首三日かな

幾たびも窓開けてゐし春の雪

電線のドレミドレミや寒雀

春雪の気配くもり硝子かな

鳥鳴き早朝の駅秋寒し

木村歩歩

三色に賑わう丘の葉鶏頭

歩行器の行き交う廊下冬温し

時雨止み最後の一葉飛行船

恙なき日々を祈らん冬の月

十日夜とて折詰の赤き飯

今泉如雲

看板に小野道風の絵も神楽月

十秒で利根川わたる冬日和

オヒルギとメヒルギと群生亜熱帯

今泉由利

トビハゼとキバウミナと夏の海

暖かし奄美大島冬最中

音なし雨降りてゐる冬初め

寒くなし暖かくもなし冬立ちぬ

武蔵野の草 野火止の森 蔦紅葉

矢崎直人

凌霄閣冬晴れ高き志を持てり

釈迦普賢文殊に冬の平林寺

冬曇り鐘楼の鐘撞かれけり

時雨るるや野火止台地二つ塚

川口カルチャー受講者自作自詠俳句集

ゆらゆらり虞美人草の芥子坊主

墨田川夏の流れに添いてゆく

かぶとむし虫取り子にかくれんぼ

かわほりのふえて山里夕餉かな

菜園に子育て楽し秋の空

コロナ禍でZOOMの語らい秋深し

公園の朝日にひかる菊の色

金沢は雪吊り施して年を越す

冬晴れて富士山望む散歩道

元旦やはれてすずめのものがたり

由利

康子

瑚都

三枝

秋山

雅泉

清徳
(篤山)

雄山

秋山

嵐雪

梅見うめみごろありし愛犬あいけん思おもいけり

肥後ひごの国くに阿蘇あそがつくりし水みづの城しろ

雨あめあがる落葉おちばの彩いろどり散歩さんぽ道どう

春はる来きたる詩吟しぎんに触ふれてひらく夢ゆめ

冬ふゆ薔薇そうび思おもい起おこして風かぜに立たつ

筆塚ふでづかに燃もえ色いろ添そへし柿紅葉かきもみじ

初日はつひの出見沼でみぬまの美田びでん溢あふれけり

初雪はつゆきや新聞取しんぶんとりし下駄げたの跡あと

朧月おぼろつき祖父そふの愛あいしたハーモニカ

来くる春はるにふいと涙なみだす七十五しちじゅうご

山頭さんとう火天城かあまぎを越こえて酒さけうまし

緩ゆるやかな水辺みずべで待まつ蛙かわずかな

秋山しゅうざん

雄山ゆうざん

雅山がざん

金子かねこ

節せつ

まき

秋山しゅうざん

雄山ゆうざん

小純こすみ

宗家そうけ

雄山ゆうざん

秋山しゅうざん

五感を澄ませば(7)

杉浦恵美子

玉の緒よ

式子内親王の歌に惹かれていた一時期がありました。

それは、子供のころ親しんでいた東映時代劇に登場するお姫様達への憧れの延長線上なのかもしれません。

丘さとみ、桜町弘子、太川恵子……わあ懐かしい。

今から思えば、深窓の姫君が、高々と結い上げた髪に簪をチャラチャラつけて打掛を羽織って街中に出没するなどあり得ないのですが、当時の私にはこのお姫様のイメージがしつかり植え付けられてしまいました。

だからお姫様というのは、女の子にとっては、夢想の世界へのキーワードのようなものなのかもしれません。もちろん何時代であろうが、或いは外国であろうが。

さて式子内親王。後白河天皇の第三皇女。まさに由緒正しきお姫様。

平安末期から鎌倉前期という混乱の時代、反平氏の挙兵をして敗死した以仁王が同母兄という戦乱の世の中に生きた方。けれど内親王は10〜20歳まで賀茂斎院だった

こともあり、きな臭い戦の世界とはどうやら無縁だったようです。歌人としては新古今集時代の人。

で、式子内親王の歌には、『アンデルセンの童話『エン豆豆の上に寝たお姫さま』を思い起こすような、生まれながらに高貴な方が持つ気高さがあると感じられます。

幾首か挙げてみてもどれもお姫様らしい格調があります。

山ふかみ春ともしらぬ松の戸に絶え絶えかかる雪の玉
水

帰りこぬ昔を今と思ひねの夢の枕にほふ橘

花は散りその色となくながむればむなしき空に春雨ぞ
降る

忘れてはうち嘆かるる夕べかな我のみ知りて過ぐる月
日を

桐の葉もふみわけがたくなりけり必ず人を待つとな
けれど

実際にこれらの幾首かを、昔習っていた仮名散らし書きの練習のために書いてみたこともありましたが。

しかしその後三河アララギに入門すると、新古今時代の特色としての物語的・詠嘆的な美の世界がアララギ派の歌風とはかけ離れていたため、次第に式子内親王からは離れて行きました。

ましてや百人一首に採られている代表作の「玉の緒よ」の歌は、あまりに烈しくしてお姫様らしくなくて苦手でした。

ところが最近この歌を眺めていて「何と生々しく人間らしく詠まれた歌か」と気付きました。

改めて解釈してみましよう。

「玉の緒よ」「玉の緒」は命の美化語。「よ」は呼びかけ。

Ⅱ「命よ」

「絶えなば絶えね」「な」は完了の助動詞未然形。「ね」は完了の助動詞命令形。Ⅱ「絶える（死ぬ）なら絶えてしまえ」ここは「！」でも付けたいところ。

「ながらへば」Ⅱ「生きながらえたら」

「しのぶることの弱りもどする」「もど」は：したら困る、…すると大変だ。さらに『もどする』で係り結び。Ⅱ「耐え忍ぶことが弱ったら困る」ここも「！」をもう一つ付けたい。

このストレートな詠みぶりは当時としてはもの凄く斬

新です。男性歌人でも真似できないものではありません。ざっと八百年昔に生きた方がどんな暮らしをされていたか一切わかりません。

また彼女の忍ぶ恋の相手が誰かということも研究されているようですが未だ不明です。

しかし、そんなことはどうでもよいことと思います。この歌からは、多くの高貴な女性にありがちなお人形のようなお姫様でなく、血の通った人間の命が伝わってきます。

最近世界中の王室内のベールが剥がれつつあるというニュースがよく聞かれるようになりました。

そんなことから、式子内親王も、几帳の向こうに生身の人間を感じる契機となりました。

見慣れた歌からもふと気付かされることもあるものですね。

八百年昔を生きた貴種なれど玉の緒叫ぶ歌が遺れり

附 録 (七)

矢 崎 直 人

小春日に武蔵野線に乗って新座駅まで行き野火止用水を歩いて平林寺に遊ぶ

凌霄閣冬晴れ高き志を持てり

俳句の吟行会で新座駅から野火止用水を歩いて平林寺まで行きました。冬曇りで午後からは雨という予報でした。十時頃から歩き始めると日が射して小春日のように暖くなりました。駅からの野火止用水の分水は親水公園になっていて、ザリガニ釣りをしている親子がいました。スルメを垂らすと多い時には二十匹も釣れるそうです。

平林寺は元々岩槻にあったのが江戸時代に移った禅の古刹で現在も修行場になっています。川越藩の松平信綱が田を開こうとしましたが、野火止台地は井戸を深く掘らなければ水ない土地だったので玉川上水から荒川の新河岸まで野火止台地を通って幅一メートル二十五キロに渡って野火止用水を引きました。

平林寺に着くと真赤な紅葉が見事でした。凌霄閣の阿吽像と高野槇、寺の境内の中に野火止用水の分水が引かれ放生池には鯉が飼われています。奥は墓地になっていて、夏目漱石の『草枕』の「那美」のモデルになったと言われる「前田つな」がねむる墓に、歴代の高僧がねむる墓があります。そして川越藩松平家の墓は一代一代がとも

大きく造られていました。

最奥部には、野火止塚と業平塚の二つの塚があります。現在は樹々が茂っていますが、元々武蔵野は草原で火事を防ぐという意味で野火止の地名が付いたと言われ、野火止台地から武蔵野が一望出来たと言われています。昼から夕方にかけては雨が降ってきて一日にして武蔵野の自然と文化の多様な表情をみることができました。

帰りはバスの待ち時間がかなりあったのでこれなら新座駅まで歩けると思われましたが、途中で道に迷い結局バスを待っていた方が早く着くようでした。その途中で平林寺の大門の大きな石碑が二つあって、いかにその勢力が大きかったのかを実感したのでした。

平林寺真赤なもみじ出迎える時雨はじめる禅の境内

『明るい年になりますように!』

中 屋 保 之

「今年もこうして無事に誕生日を迎えることができますことを有り難く思います。この一年は、コロナ禍も続く中、国際的な紛争や、世界各地での自然災害などが重くのし掛かり、心が痛むことの多い年であったように感じます。世界各地での戦争や紛争により、子どもを含む多くの人の命が失われていることに深い悲しみを覚えます。国際社会において、平和な世界を作っていくという大きな目標に向かって、皆が相手を尊重しつつ力を合わせていくことの大切さを身に沁みて感じております。」

二〇二二年十二月九日、五十九歳の誕生日を迎えられた雅子皇后のコメントである。年初、ようやく下火になったかに見えたコロナ禍はその後、変異を繰り返しながら再び猛威を振るいだした。安倍元総理銃撃事件の生々しい映像が映し出されたのは七月八日の真ツ昼間であった。また、児童を巻き込んだ事件や事故も頻発、拘わったとされる大人たちの無責任さには目を覆いたくなる。いじめ等においてもその手口に凄惨さが増した一年であった。

二月にはロシアによるウクライナへの軍事侵攻が勃発した。このニュースが飛び込んだとき、多くの人が一九七九年に起きたアフガニスタン紛争を想起したことであろう。背景を単純に同一視は出来ないが、その後十年もの間続いた挙句、完全撤退を余儀なくされた過去をロシアという国は全く学ぼうとしていないのでないだろうか。かつて、ナチスドイツによる侵攻を受け、その理不尽さを身を持って体験したはずの国の信じがたい行為と言わざるを得ない。我が国も他国を領土化したという事実を目を背けることなく、平和外交の道を模索し続ける責務を負っているはずである。にも拘らずである。昨今の国政や地方の自治を預かる方々の体たらくぶりには、呆れるほかない。こうして二〇二二年を振り返ると、総じてあまり良い年ではなかった様な気がする。

個人的にも、三月初めの検査で「前立腺癌」が見つかり、五月の末に摘出手術を受けた。事前の担当医からの説明で「手術もさることながら、事後のケアの方が大変だよ」と言われていたが、全くその通りである。しかしあり

がたいことに、テレビ等で活躍のテリー・伊藤氏や売れっ子演出家の三谷幸喜氏等が、自らの体験談として、紙パ
ンツや、吸水パット^①の活用をオープンにしてくれているおかげで、私も友人たちに堂々とその効用について語
れている。比較すべくもないが、オピニオンリーダーたる者、少しは見習って欲しいものである。

また、雅子皇后はこうも述べている。「三年近くにもわたって制約のある生活が続いている子どもたちへの影響
も案じられます。重苦しい空気の中で過ぎてきたように感じる今年ですが、先日のサッカーのワールドカップでは、
日本中の人々が熱心に応援をする中、日本代表チームがすばらしい健闘をし、多くの人々に、大きな感動や夢とと
もに、困難に立ち向かう勇気を与え、日本の人々が心を一つにする機会になったことも印象に残る出来事でした。」
「#（ハッシュタグ）三年ぶり」に寄せられた多くの「つぶやき」に、各地の祭りなどのイベントに集う子供たち
の嬉しそうな顔を思い浮かべることが出来る。

藤野君山の詩に「宝船」がある。

壽海波平	紅旭鮮	じゅかい	なみたいらかにして	こうきよく	あざやかなり
遥看宝字	錦帆懸	はるかにみる	ほうじ	きんぱんのかかるを	
同乗七福	皆笑含	どうじょうのしちふく	みな	わらいをふくむ	
知是金銀	珠玉船	しる	これ	きんぎん	しゅぎよくのふね

二〇二三年の安寧を祈る。

楽しい時間 122

山本紀久雄

2022年11月30日

「明治天皇が鉄舟から得た判断基準」その七

明治4年（1871）7月、廃藩置県と宮廷改革が断行され、西郷隆盛の推薦で鉄舟が明治天皇の侍従に就き、侍読には大久保利通の推薦によって元田永孚が就いた。侍読とは、天皇の側に仕え学問を教授する学者である。

大久保の元田推薦は、元田の書いた熊本県藩知事の意見として朝廷に提出された建白書を大久保が見たことからだった。

《維新に際して天子のお膝もとで凶徒が暴意をむさぼるのは、すなわち朝廷の威光が発揮されていないからである。

朝廷の威光が発揮されないのは、王政が実際に行われていないからである。願わくば今後は、天皇陛下が南殿（紫宸殿）に臨御し、その御前で諸大臣が奏議し、その公儀を採用して天皇自ら裁断を下すならば、公明正大の政治が行われ、人心も始めて感服することになるだろう。地方に中央の政治教化が及ばないのは、地方官に人を得ていないからである。適宜人材を登用し、広く全国に政治教化を徹底させるべきである。自分のように世襲で地位を得た



知事は排除されなければならない。よって、自分はここに謹んで罷免を請願する》（写真は元田永孚）

元田提言の要点の二つは、立法に関する議論は天皇の前で行ない、天皇が自ら裁断を下すのが望ましいということであった。明治天皇が以後、閣議その他多くの会議に熱心に顔を出したのは、元田の感化によるものではないかと思われる。

もう一つの要点は、要職にある官吏の世襲はやめるべきという、当時では思いきった意見であったが、これは直ちに実現されるといいうわけにはいかなかった。

建白書を読んだ大久保が熊本県知事に元田の人物像を聞いたのだすと、答えは「果たして元田がその任に適するかどうかはわからない。しかし、その人物は間違いなく保証する」であつて、元田は明治4年（1871）5月侍読に就任した。

元田に対する明治天皇の信任は厚く、政府の重臣達も元田のことは無条件に認めていた。推薦者である大久保利通は、めつたに他人をほめないが「この人さえ君側に居れば安心だ」と言い、副島種臣は「君徳の大を成すに一番功労のあつたのは元田先生である。明治第一の功臣には先ず先生を推さねばならん」と述べたという。

元田と鉄舟は明治天皇の侍読と侍従として、お互い十分に理解しあっていただろうが、侍従という職種は何をする業務なのか、具体的にわからないので、侍従を経験した人物の著書、それは昭和天皇の侍従であつた入江相政著の『城の中』（中央公論社1959）から拾つてみる。《二十何年の間には、御意見と意見が合わなくて、激論になったこともある。陛下も元来非常に大きな声だし、私も決して小さいほうではない。わきで冷静にきいていたら、さだめし相だな騒音だっただろう。私はもともとずうずうしいし、表面はあるいは多少遠慮しているように見えるかもしれない

が、内心はほとんど遠慮なんかしていない。ずいぶんふてぶてしいやつだと思いいなつたろうし、今でも思つていらつしやるかもしれない。しかしそつういふことがあつても、全くただその場かぎりのことで、後までひつかかりになつたようなことは「度もない」と。

これによると侍従とは、特に決まつた業務があるわけではないが、常に天皇と親しく接し、遠慮なく天皇に物事を発言できる職務であることがわかる。

侍従に定まつた業務がないことは、鉄舟の内弟子だつた小倉鉄樹著『俺の師匠』（島津書房）に、鉄舟が宮内省を辞めた明治15年（1882）5月に《これで仲々した。宮内省にいたつて何の用もないのだ》と述べていることから分かる。さらに、『陛下は色々の事についてよく臣下と御議論なされた由であるが、其の折阿諛迎合する者をお嫌ひになり、假令（たと）どんなにお言ひ負けになつても、それがために其の臣下を遠ざけられるようなことはなかつた由に拝聞する』とある。

また、渡辺茂雄著『明治天皇』（時事通信社 1966）では、『いつも剛健廉直の士風をもつて忠勤をはげんだが、中でも山岡鉄太郎のごときは誠忠無比の士で、ことに少年時代から心身を磨練しているの、躬行（きゆうこう）もつて君に善をすすめることを以て臣子の分とこころえ、直言してはばかるところがなかつた』とある。

この中で「躬行もつて」とあることに注目したい。「躬」は自分という意味であり、「躬行実践」とも言うが、どんなに立派なことを言つても、実践躬行が伴わなくては人がついて来ないという意味である。

鉄舟が禅修行に入つたのは、文久3年（1863）4月の清河八郎暗殺事件によって、責任を追及され、幕府当局によって御役御

免の上蟄居処分になり、これが宥免されたのは文久3年12月末で、二十八歳になつてゐた。「ありがたい。これで外出ができる」と自由になつた喜びを叫ぶと同時に、八ヶ月間の謹慎によつて自らの奥底を見つめた鉄舟は「やはり自分には剣だ」と、今後の生き方の中心を改めて定め、その第二步を踏み出すべく立ち合つたのが浅利又七郎義明であり、結果は見事な完敗、その後もどうしても浅利に勝てない。

昼の浅利道場での稽古を終え、日課としている夜の自宅で座禅、眼を閉じると、たちまちすぐさま浅利がのしかかってくる。圧迫され、心が乱れどうしようもない。そのことを明治13年（1880）に記した『剣法と禅理』で次のように語っている。

《是より後、昼は諸人と試合をなし、夜は独り坐して其呼吸を精考す。眼を閉じて専念呼吸を凝し、想ひ浅利に対するの念に至れば、彼れ忽ち余が剣の前に現はれ、恰も山に對するが如し。真に當るべからざるものとす》

この大きな山を越え打ち破るためにはどうしたらよいのか。日夜真剣に考え続けてみた結果は「心の修行で立ち合うしかないだろう」ということに気づいたのである。

鉄舟が、宮内庁に出仕するようになった明治5年からの禅修行三年間は、三島の龍沢寺星定和尚に師事し、その後、明治11年（1878）頃から大悟する明治13年（1880）までは、再び滴水和尚に師事したが、この他に相国寺の独園和尚、円覚寺の洪川和尚にも教えを受けてきたが、当時の鉄舟は《昼は諸人と試合をなし、夜は独り坐して其呼吸を精考す》（剣法と禅理）という状況であつた。

つまり、剣で浅利又七郎に勝つため、心の修行である禅に没入していたタイミンクに侍従となつたわけである。次号へ続く。

『酔いの徒然』（二二九）

丸山 酔宵子

『錦秋・九州の旅』

サッカーワールドカップの初戦で強豪ドイツに快勝し日本中が湧きだしている真つ只中、紅葉と黄葉に彩られているであろうと期待をもつて、勇んでの一路九州縦横断「錦秋・九州の旅」である。

羽田から鹿児島空港そしてチャーターバスで霧島神社へと、先ずは、速攻移動である。紅葉が一面に包まれた参道を想像していたが、南国鹿児島の紅葉は、残念ながら11月中旬で終わってしまったようだ。

紅葉の散った参道の木立ちの先には、朱塗りの荘厳な社殿がにぎにぎしく佇んでいる。創建が6世紀ごろと言われる天孫降臨ニギノミコトを祀った数少ない「神宮号」を名乗る神社である。

紅葉且つ散る参道の朱塗り門

酔宵子

霧島神社を後にしての宿泊は、坂本龍馬と妻お龍が新婚旅行として泊った霧島温泉である。京都の寺田屋で襲われ傷を負った坂本龍馬は、西郷隆盛らのすすめで妻のお龍と霧島に湯治療養で訪れているのである。龍馬は勝海舟から、西洋では結婚後に夫婦で旅行に行く習慣があると聞いていたように、これが日本初の新婚旅行といわれている。

翌早朝、ホテルを出発し、桜島の雄姿を右手に見ながら「垂水千本銀杏園」に向かう。

「まるで映画のワンシーンのようだ」そんな表現で紹介されることもある「垂水千本銀杏園」は、その名のとおり、千本の銀杏が植えられ、あたり一面は黄金色に染まる垂水市を代表する名所。昭和53年から園主の中馬夫妻が、コツコツと、2人3脚で作り上げた「黄金の楽園」なのだそう。

4・5ヘクタールの敷地に、約1,200本の銀杏が植樹され、ライトアップ施設も整備されている。

東京神宮外苑とか御堂筋の銀杏並木以上の景観を期待していたのであるが、今年は台風被害で樹々が甚大な被害をもたらし、黄葉が十分にままらなかったようだ。

今回は残念至極でありましたが、その「黄金の楽園」は創業者の心意気を含め十分イメージできるのであります。

銀杏散る眼下に迫る桜島

酔宵子

垂水から南九州自動車道で宮崎の高千穂峡へ。約12万年前、阿蘇の大噴火により噴出した火砕流が五ヶ瀬川（高千穂峡）の峡谷沿いに厚く流れ下り、冷却固結し柱状節理ができ、浸食によって再びV字溪谷となったものが高千穂峡である。高さ80～100メートルにも達する断崖が7キロメートルにわたり続いている。

戦前の「紀元節」に歌われた、

雲に聳ゆる高千穂の

高値おろしに草も木も

なびきふしけん大御代を
仰ぐ今日こそ楽しけれ

高千穂峡の紅葉はまだ十分残っている。清らかな水の流れの溪谷に、垂れる紅葉や大きな岩に散り積もった紅葉が、静寂の中で、趣あるコントラストが絶妙である。

溪流の岩に重なる散る紅葉

酔宵子

高千穂峡を後にして、大胆にも九州を横断し熊本地震から5年、崩壊した天守閣が修復し公開されている熊本城へ向かう。6層建ての天守閣は確かに修復されているが、天守閣は熊本地震からの復興のシンボルとして最優先で進められたが、昭和35（1960）年に建てられた鉄筋コンクリート建造物で、重要文化財ではない。

しかし、崩れた石垣はそのまま、そこにあった櫓などの重要文化財は、解体して取り出した瓦や柱などを可能な限り元通りにしなければならぬ。現在の修復状況は2割程度で、完了するのは令和20（2037）年までかかるとのことである。

石垣の櫓の跡に紅葉散る

酔宵子

今回の「錦秋・九州の旅」のもう一つのハイライトは、本年9月23日に開通した西九州新幹線「かもめ」に乗ることである。

熊本城を見学の後、熊本港からフェリーで島原に行き、雲仙温泉でたつぷりと温泉を堪能し、翌日、長崎駅から西九州新幹線で終駅の武雄温泉までの約30分弱の乗車である。トンネルが多く景色はあまり期待できないが、真新しい和テイストの内装はすっきりしている。

「葉隠の里」佐賀。武雄温泉から佐賀の山々を越えて行くと、唐津市作礼山の中腹に、個人が30年近い歳月をかけて築き上げた「環境芸術の森」がある。

『紅葉は地球を救う』というスローガンのもとに、約1万本を超える紅葉や銀杏が植えられ、深紅と黄金とりどりに、今が盛りと豊かに色付いている。

黄金と深紅に粧ふ佐賀の山

酔宵子

九州は日本列島では南に位置しているからであろうか、温かいイメージがあるが、福岡や佐賀は、玄界灘の厳しい気候が影響され、本土よりもっと厳しい気候なのである。

福岡の紅葉名所である秋月城址は標高800メートル、三方を山に囲まれた要塞で、「筑前の小京都」とも呼ばれる城下町。城址に続く趣のある石畳の小道を進んでいくと、将に今が盛りの紅葉と黒門のコントラストが特に素晴らしい。

鹿児島から宮崎、熊本、長崎そして福岡への「錦秋・九州の旅」のクライマックスに、ここ秋月城でやっと追いついたのであります。

黒門の左黄葉右紅葉

酔宵子

房州 花摘み唄

高橋 育郎

房州よいとこ チヨイと常春の

光のどかに うらうらと

お花畑は 花ざかり

色もとりどり 咲き乱れ

心はずむよ 唄も出る

摘もうよ 摘みましよ 花籠に

房州よいとこ チヨイと南風

花のたよりに さそわれて

若い二人の ランデブー

つくつてあげましょう 髪飾り

微笑交わし 春を呼ぶ

摘もうよ 摘みましよ 幸せを

房州よいとこ チョイと花どころ

フラワーラインに 青い海

温泉あびて ゆつたりと

心もからだも リフレッシュ

二人のデュエット 夢を呼ぶ

摘もうよ 摘みましよ 花の束

絹の話（146）

「アトリエテレビ」 今 泉 雅 勝

衣被^{きぬかづき}ときぬかつぎ

人は誰でも食べ物に好き嫌いは有りますが、日本人で米と里芋が苦手という人に会ったことはありません。

幼少の頃から里芋は自分のDNAに刷り込まれた特別の存在でした。初秋のお月見のお供えの中で里芋は脇役でしたが必ず供えられていました。そのお下りの「きぬかつぎ」を塩や醤油をちよつとつけてはおぼるのは至福の一時でした。

晩秋に旬をむかえる甲イカと里芋の煮付けなどで季節を感じたものでした。その頃から味噌汁に大根の千切りと里芋の具が入る様になり、初冬の三河地方の味噌おでんには里芋は欠かせないものでした。

正月のおせち料理には必ず「赤芽」（セレベス）というヌメリの少ないホクホクした煮物が並んでいて、普段のおかずにはポクポクしたやや大味の大きな「八つ頭」なども食卓に登場しました。

南太平洋のタロ芋

30歳に手が届く頃、南太平洋の島々に原始美術の美を求めて旅した時、島の奥地ではどの島でも主食が「タロ」芋で、大きな木の葉に包んで蒸し焼きにして食べていました。

トンガ王国では毎朝が覚めると、宿の女主人が「ヤム?」「タロ?」と大きな声で聞いて来ます。トンガの朝飯の主食は茹でた芋食で、タロ芋はヤツガシラと同じ食味で懐かしさを感じたものでした。腹持ちは良いのですが毎日食べ続けると胸焼けがして来るので、あっさりしているヤム芋（タピオカ）を食べる日が多かった事を思い出します。

里芋のルーツ

南太平洋のメラネシア方面にも日本の里芋と良く似た仲間があちこちに自生しているので、里芋にはどんなルーツがあるか調べてみました。

原産地は良く判りませんが、東インド、マレー方面から人の移動と共に東南アジアやオセアニアの島々広がり、日本にもたらされた物と思われます。

しかし里芋の遺伝子を調べると二つの系統があつて、日本には東インドのアッサムやビルマ方面から直接伝え

られた種類ではないかと言われています。それはとりもなおさず日本人の渡来ルーツの一つと言も言えるでしょう。

雑煮

雑煮の起源は室町時代の武家の宴会の酒席に出されたのが始まりと言われていますが、それは米の餅を食べるという「煮雑^{にまげ}ぜ」から始まっているようです。しかし最初の雑煮は稲作が日本に伝わる以前に南西日本に漂着した人が携えて来た里芋を皆が集まって食べた事に由来していると考えられます。里芋は栽培技術など殆ど無くとも自生繁殖し、稲の様に風水害や害虫の心配も少なく保存にも適していて、命を繋ぐ大切な食べ物であったと思われる。弥生時代になって米文化が広つて来ると、支配者から次第に民衆まで祝いの日の雑煮に餅を入れる様になったのではないのでしょうか。したがって雑煮には里芋を入れる事が雑煮の雑煮たる所以だと思います。

この様に長い間、日本人に食されてきている里芋は日本人の食味の原点とも言える物ではないでしょうか。

衣被^{きぬかずき}

平安時代高貴な身分の女性が屋外に出る時、人前で顔

を晒すのははしたない事とされてきましたので、その人の好みの色に染められた絹の薄く透けた布をすつぱり被って歩いたようです。この布はさらりと脱ぐ事ができる事から、この様子を「衣被」と言う様になりました。

さらに平安時代後期になると貴族の女子の間で大袖の下に着ていた小袖を表に着る事が流行し、外出の時など小袖を脱いで両手で頭から覆り、顔を隠して歩く姿も衣被と言はれる様になりました。

茹でた里芋の皮はちよつと押さえただけで、つるつとむけるので、その様子が「きぬかずき」（衣被）姿の衣を脱ぐ様に似ている事から、小ぶりの里芋を「きぬかずき」と訛^{かた}って言うようになったと思えます。里芋の「ぬる」っとした柔らかさが絹のしっとりした感触に似ています。

「江上浩二の独り言」 61 江上浩二

民主主義って

我々日本人は少なくとも戦後生まれの世代で、義務教育、学校教育で本当の民主主義について学んだであろうか。恐らく、色々場面で選挙という行為があるが、多数決で第1位で選ばれた者を単に当選としていなかったであろうか。それが本当の民主主義で正しいのであろうか。それは無いであろうと思ひ筆を執った。

教科書の資料、専門的資料などは不要で、今日本人が使っている日本語の民主主義から出発したい。もともと、日本には民主主義という文化はなく、漢語のそれも democracy (wild の引用) を中国語に訳した「民主主義：民ノ主ノ、民ガ主ノ、といった相反する意味状況で混乱していた」ものを日本語として使っているのだ。日本では democracy および republic に対しては当初はシンプルで区別なく対処しており、1862年に堀達之助が作成した英和对訳袖珍辞書ではいずれにも「共和政治」の邦訳を充てていた。繰り返すが万国公法（中国、1863年）の渡来とその強力な受容により「民主」なる語の併用と混用の時代を迎えることとなる。

要は、民主主義という理念はよく探求もされずに、間接的に有権者・民意を代理する議員を曖昧な多数決によって選び、委託している状況を民主主義と思っているように見えるのだ。

当然公平な条件という事は前提であるが、公平とは該当のそのある団体組織を運営するための前提に沿って考えた場合、種々の異なった公平があることに気づくであろう。

とりあえず今日本の国政選挙、衆議院議員の投票は小選挙区制で例えば5人立候補して、1位41%、2位39%、3位10%、4位8%、5位2% という得票率の場合、1位41%の方が当選となってしまうのである。米国だと多数決・過半数の原則で1位と2位で再選挙を行わなければならない。逆転の余地がある。5人立候補しても始めから1位の方が50・1%以上の過半数をこえておればそのまま当選という事になる、

古めかしい言葉だが、x x xに資するという表現があるが、令和4年から18歳以上の成人に投票権が与えられるが、また25歳上になったら国政へ立候補することもできるが、自らを振り返ってみて本当に投票権、立候補に資するものを備えているかと。

身近の地域の自治会の役員選挙などを考えても、町会費を収めている正会員が立候補できる、または選挙委員会ですめ指名された候補者が総会で町会費を収めている正会員の表決承認を受けなければならない。今時の業界団体でも同様で資本金に準じた会費を納めた正会員が理事役員へ立候補又は理事会から推挙され、総会で議決権を有する正会員の承認を得なければならない。

消費税

少し立ち入って考えると、国政での有権者は、何か正会員として納めるべき会費とは何なのである。ここでは数値の議論は別として、所得税、住民税でもなく、私は最低限生きたために購入している物の消費税だと思っている。資するべきものは義務教育の学校教育で受けるべき、民主主義とは社会の中で生きていくために必要な経済の仕組み、法律などの仕組みを実践的に学ぶことと思う。

最後の課題は国政立候補者の資するべきことであることに気づく。

現時点では、公民権停止者でなければ誰でもよいのである。皆さん、本当にそれでいいのかと疑問を持っているのではない。物価、貿易収支、企業の法人税率の優遇が国によって大きく異なるが、国民の経済課題に関する要求は厳しく、経済に疎い人が立候補者でいいのだろうか、更に、外交・国際問題、国防や戦略的インテリジェンス活動を要求される状況等々、立候補者として資するべき事柄は非常に多いのが実状で、今我々有権者が投票し選出されている議員さんはいかなる立候補条件を所属する政党なり、個人なりで考えているのだろうか。

ここからが、私の自由な独り言を呟く事を許して欲しい。国政に立候補したい方は、少なくとも事前に2か年間の期間は、国の機関、もしくは国が委託した団体が設計した「国政立候補プログラム」に参加すべきと考える。履修し、あるレベルの設定された要件を満足しなければならぬとした。その2か年間は社会人として働きながら履修可能な仕組みであること。例として相応しいかどうかかわからないが、防

衛大学校、気象大学校、税務大学校のように、行政機関の専門人材育成を目的としたシステムのようにな国政議員に立候補したい成人は履修すべきと思っている。如何であろうか？

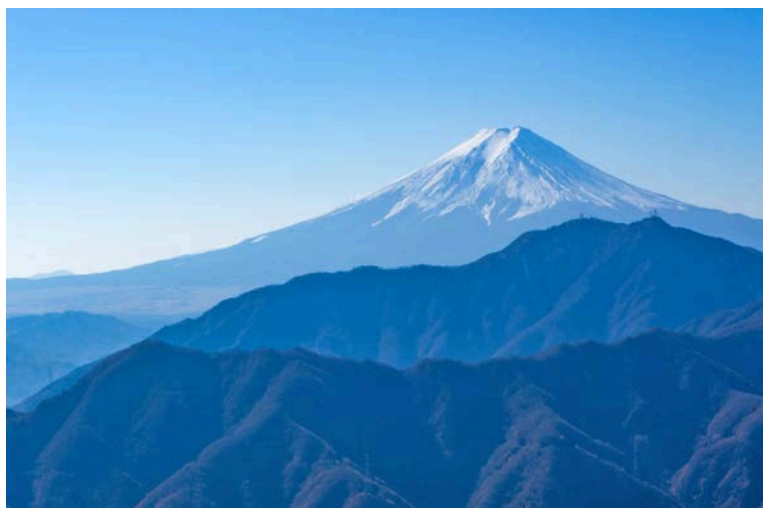
しかし、世界の現実はずっと厳しく、間接選挙で投票した代理人である立候補者の当落を決定する多数決の運用管理でなく、社会を動かす・経済活動を通じた変革が起きていることを解説している次の資料を紹介させて頂く。

大都市エリートが民主主義を減ぼしてしまう理由／新自由主義的への反省と民主的多元主義の再生、施光恒・2022年11月30日 東洋経済オンライン

資料によると『新しい階級闘争…大都市エリートから民主主義を守る』は、Michael Lind, The New Class War: Saving Democracy from the Metropolitan Elite (London: Atlantic Books, 2020) の邦訳で、この『新しい階級闘争』は、戦後実現した「民主的多元主義」の安定した政治が、1970年代に始まった新自由主義に基づく「上からの革命」の影響を受け、機能不全に陥った結果、今日のアメリカでは国民統合が揺らぎ、分断が深刻化していることを指摘し、また、その分断の解消をどのように図っていくべきかについて論じられ、Lind リンド氏の第1の関心はアメリカ社会であるが、本書の議論は日本社会の現状を考えるうえでも大きな示唆を与えているという。



初狩便り
(14)



花野みぷり



富士山

初狩で農作業をする私たちは富士山が大好きだ。田んぼや畑から富士山は見えないが、みんな自分の好きな富士山ビューポイントを持っている。藤沢集落の子神社^{おのじんじや}、中央高速道路・初狩パーキング、散歩途中の橋の上や、中央線の車窓など、どれも美しい。私は都留市のホームセンターに向かう道路から見える富士山が好きだ。

山梨県大月市には「秀麗富嶽十二景」という富士山を美しく望める山がある。このうち四番山頂の滝子山（一六一〇m）と、十一番山頂の高川山（九七六m）は初狩駅からのハイキングコースになっている。今回の三枚の写真は、菅野昌英さんが撮影した。朝日に輝く写真は、日の出に合わせて、五時に出発して高川山の山頂から写したものだ。撮影後、八時には畑に戻りみんなと農作業をするという健脚だ。

「富士山と松」のお正月らしい目出度い写真は高川山の近くの屏風岩山から、山なみの向こうに富士山が見える写真は滝子山山頂からの撮影。菅野さんの富士山の写真はまだまだたくさんあり、ため息が出るほど美しい。

（写真：菅野昌英）

本田カイロプラクティック先生の春夏秋冬

本田のひとり言

<https://hondachiro.exblog.jp/>

2022年12月2日

水分補給は寝る前より起きた時に

いよいよ今年も残すところ後1か月になりました
ちよつと12月に入ってから気温も下がり
秋から冬へと移行しました

12月は何かとバタバタしますので
つついづい水分を取り忘れたり
それにより小便の回数が減ったり
寒さから席を立つのが億劫になり
座りっぱなしになったりします
水分補給ですが

1日8回小便が出る量の摂取をお勧めしています
夜中に小便で起きてしまう

という方は入眠2時間前には水分摂取を止め
喉が渴いたら一〇二〇にしておきましょう

寝る前に水分補給より

起きた時に水分補給しましょう

空気が乾燥してきます

皮膚はツセリンとアトリックスで保護し

身体の中からは水分補給で潤わせましょう

今日も笑いながら行きましょう

2022年12月7日

ぎっくり系とウィルス感染

12月に入り早一週間

日に日に寒くなりますが年末の実感はありません 笑

この時期のなると

どこか忙しくなくなり色々とやらなくてはいけない事が
増え

身体を疲れやすくします

その状態で 飲み会やお食事会で内臓が疲れ

大掃除で身体をいつもと違う使い方をして

ギックリ系 を発動させる時期でもあります

身体を壊してしますと必然的に精神的にも不安定になり

負のサイクルにはまっていきます

ですので

忙しい時こそ 3S+ゆたぽん+ヨーグルト+八分

を実践しギックリ系やウィルス感染など

身体を壊し切らない様に予防して行きましょう

身体を冷やさない様に

手洗いうがいをしましょう

今日も笑いながら行きましょう

「冬の養生と内燃」

冬は蟄藏・隠れる時

穴に籠って 動きを止めて

ゆったり ゆったりする季節

ゆつたり時を過ごせれば

外をめぐった経絡・気血

内へと向かって 内臓を

ゆつたりじっくり 温める

冬は内部を温める

寒さで外側収斂し

陽気をジワジワ 閉じ込めて

縮まることで 密度増し

圧で摩擦を生み出して

内に火をつけ 内燃す

この火が内臓 温めりや

元気が漲り

やる気・根気も満たされる

冬に内臓 養わねば

精力・体力養えず

年間通して消耗し

早く老化が訪れる

一年単位で考えりや

冬は眠りの夜の時

人は寝なけりや 生きてけぬ

冬は動きを止める時

頭も身体も休ませよ

冬は動きを止めてみて

其処で 自ら振り返り

反省・改善 見出して

やる気や未来を見出せば

心も内燃 動き出す

冬は養生・内燃し

生命の火種が付いたなら

その火を育てりや 気が充ちる

内が燃えれば、動き出す

新たな未来が動き出す



「東洋医学の魂 その壹」

東洋医学にや 魂がある

魂とはたましい 動きの気

人の活動 主る

魂の役目は3つあり

一つは心を動かして

精神・感情 発動し

心の情動つくり出す

二つは身体を動かして

筋肉使った活動で

人の行動を主る

三つは心身動かして

自分の命を満たす為

目的達成させていく

魂とは神に随て

往来するとされており

神とは生命全体で

本能・欲求・能力の

素質をあらわす主体なり

命の本能 魂により

あらわし 生きるが人の性

魂が動けば 神動き

自分の命の方向へ

行動・経験してゆけば

心も身体も活性化

生命力を上げるには

魂ふるわし動くこと

自分の命で動くこと

動きの中で滞りや

怒りが湧いて 力むなり

力めば 動きを変えてみて

新たな方向見出せば

魂ふるわし 動くのみ

動いて 達成できたなら

喜び湧いて 気が緩み

人の存在 輝くぞ

魂とはたましい 動きの気



京都きょうとに遊あそぶ

令和四年十一月十四日

横山精真

濃淡のうたんの黄紅こうこう 香塔こうとうに鮮いやかなり

洛中らくちゅう洛外らくがい 清天せいてんに満みつ

古都こ殷賑いんしんにして何なんぞ閑雅かんが

悠久ゆうきゅうの文明ぶんめい 復また百年ひゃくねん

遊京都 令和四年十一月十四日

濃淡黄紅香塔鮮 洛中洛外滿清天
古都閑雅何殷賑 悠久文明復百年

（通釈）黄葉や紅葉それぞれ濃淡があつて神社仏閣の周りを染め抜き、京都は清秋の氣に満ちていた。それにしても、人が多く繰り出しているのに、どうして閑静で雅な佇まいが保たれているのであろうか。これが古都の趣と云うものであろうが、悠久の歴史がゆるやかに、又、百年を過ごそうとしている様に感じられる。

※「地域文化功労者賞」授与式を明日に控え、家内と次女で京都を散策した。南禅寺で久しぶりに豆腐料理を食べ、禅林寺、そして詩仙堂を訪ねた。

名刹は以前と変わりなく、只、詩仙堂は平成十三年に歩き旅で訪れた時より随分賑やかに感じられた。あの時は皆と思ひ思いに心ゆくまで美しい庭で吟じたものだった。

その下の「一乗寺下り松」は以前に増してしつかりと囲いを整えられていた。そして又、その下のお菓子屋さん場所にと、そこには嘗てのお店はなく、駐車場に変わっていた。

あの時は歩き辿り着き、詩仙堂を目の前にして、お店で後続者を待った。お店のご夫婦が愛想良かった。お店の壁に貼つてあつたチラシ「花さしき寺あればこそ鐘がなる」が目に入り、吟ずることにした。お店の主人がにこにここと飲んでお菓子を包んで呉れた。小さき時、お隣で要望にこえて歌うとやんやの喝采でお菓子を呉れたのを思い出したものである。

楽しい想いが懐かしかった。お元氣であれば家内や娘に紹介したかった。

変わらない京都も到る処で時と共に変わって行くのを思わされた。

編集室だより【二〇二二年十一月】

今 泉 由 利

○奄美大島へゆく。三河アラギ誌に「絹の話」を(145回)連載して下さっている「アトリエ・トレビ」の長谷川千代氏、今泉雅勝氏の「奄美大島泥染めの旅」に割り込ませていただきました。

○日本神話の皇祖神、神であり、女神、太陽神、農耕神、機織神：天照大神。

日本の、天照大神。機織などされていたことを知り、織物、染物、繊維、図案などについて、知ってゆく人になろうと決めた。

○地球上の日本から一番遠い所の繊維事情からはじめて：知りたいことを知りながら：日本に帰ってくれば良いと。

○日本の静岡辺りより、地球の中心を通過して突き進むと、アルゼンチンのブエノスアイレスに到ると聞いた。

その時まで生きた、私の全部の物を積み込んで乗った船、四十五日間、海よ空よ太陽よ月よ：アルゼンチンのブエノスアイレス港に到着した。人間が住んでいる所だから「何とかなるさ」「何とかならなくて」本当にびつくりした。

なんとかして、ブエノスアイレスに住み始め、アンデス山脈に近い方向に、いよいよ織物、染物の旅と思うと、内戦とか、恐ろしいことが沢山おきていて、一人で染物だ！なんて言っている場合ではない！

ブエノスアイレスの町にあるアトリエヘッサン、クロッキー：に通って、繊維の旅に出られる日を待つ。いつ

まで待っても、そんなのんきな日は来ないだろうことを知りはじめる。

○ブエノスアイレスで知り合えた方々と、スペイン語での生活は、とてもとても楽しく、落付いて、アルゼンチンの大自然、パタゴニアでのこと、アンデス山脈のこと、私の一生の宝を、沢山沢山吸収できたのでした。自分のことだけ言っているわけにはいかない。アルゼンチン生まれの私の二人の女の子を、アルゼンチン人であり、日本人にもしなければ。アルゼンチンの小学校は、夏休みが三ヶ月間もあるから、その三ヶ月間を日本の学校に入れるべく、日本住いをしていった。

○子供達が学校へ行っている間は、モデルさんに来ていただき、絵描き：になつていたのです。

○アルゼンチンの学校の夏休みが終る頃、また大移動をして、アルゼンチンの人のようになっているのです。

アルゼンチンと日本とを往復すると、丁度地球一周した距離になり、地球の上の、行ってみたい所に寄りつつの旅が出来るのでした。

○日本を離れている時、姉二人、父、母、を亡くしました。こんな悲しく淋しいことは耐えられません。日本の国に居なかったことは、本当にごめんなさい。

○奄美大島の自然に、深く深く溶け込まれて、ご自分も、その中に居られる。命の絵が描かれる。

田中一村画伯、美しい奄美大島を永遠の奄美大島にされました。一村画伯は、漢詩と書を習っておられたということです。

田中一村 俳句

○ 銀河見ゆフクロー聞こゆねむの花

○ 砂白く潮は青く千鳥啼く

○ 白砂の丘千鳥たわむれあざみ咲く

○ 小春日を小夏と聞けり奄美島

○ 鶯もソテツを侶とす奄美島

○ 風強し波は届くか残月に

○ 熱砂の浜アダンの写生吾一人

「三河アララギ」について

◇三河アララギ発行所 〒一五〇・〇〇一三

東京都渋谷区恵比寿三・四五・三

フオーレストヒルズ三〇二

ケイタイ 090・8434・8646

TEL 03・6765・5838

◇URL <http://imaizumiyuri.jp/>

E-mail imayurizm@gmail.com

◇三河アララギ誌は毎月発行します。

◇どなたも参加、投稿いただけます。

三河アララギ編集室 今泉由利 までご相談ください。

◇原稿は毎月末日までに、発行所まで郵送、メール、お届け下さい。

◇会費制は廃止。

◇昭和七年、三河地域のアララギ歌人が集い、創立歌会が開かれ、御津磯夫主宰「三河アララギ」誕生。

◇令和四年現在まで一号の欠刊なく、続いてきました、続いてゆきます。

◇編集・発行 今泉由利